



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.275
2026.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第10回 ◆ 勝田市史編さん事業の夜明けと文化財保護 ◆

1962(昭和37)年の『市報かつた』第39号に「宇宙時代をさかのぼる 郷土の史蹟を探る」[郷土史1]として次のような記事が掲載される。

宇宙時代という言葉も耳新しく聞こえない昨今、つぎになにが飛び出すか興味のあるところですが、当市の発展もめまぐるしいものがあり、その変貌は驚くべきものがあるが予想されます。そこで時代を逆行するようですが、昔々の話や、名勝、史蹟など、市の輝かしい発展により忘れ去られないよう、順次紹介してゆきたいと思えます。歴史は、今も生きているのです。郷土の史蹟を探る、第1回として、「中根の十五郎穴」を取り上げました。



中根十五郎穴 伝説・火の雨を避ける

…皆さんが湊線で中根ー那珂湊間を通る時、東南に向かって大きな口を開いている穴の群に気づかれるでしょう。

それが中根十五郎穴(勝田市大字中根1225 西野茂信氏所有地)なのです。…私達の祖先が石器を使い、青銅器に変わり、さらに文化が進んで鉄器使用時代になりますがこの鉄器が使用されはじめた頃が十五郎穴を作った人々の住んでいた時であり、生活様式だったわけです。

このことについて、徳川時代の小宮山風軒先生(水戸の人)が「土地の人の言うには、ずうっとむかし、火の雨が降り、その時、五郎十郎と言う人がいて、避難したところで、十五郎の名が残った。また、家がなかった時住んだ穴説もある。しかし、私がひそかに考えると、葬所であったと思う」と書いています。…発見された遺物から見て十五郎穴は奈良朝時代のものであり、古墳文化終末期のもので、高塚古墳を作る風習とは別に、丘の斜面に横穴を掘って墳墓としましたが、中根十五郎穴はそういう横穴古墳の遺跡なのです。…」

さらに、発見場所の単位ごとの横穴数や出土遺物など詳細な報告を掲載し、未発見横穴を含めた総数を4,5百箇、横穴は凝灰岩をくりぬいたもので、大小様々なものがあることなどが説明される。とくに出土遺物の説明後、「これらは、新しいといわれる古墳から出土するものとほぼ同じですが、古墳の場合はほとんど仏教文化の影響が認められないのに反して中根の十五郎穴に納められている遺物は、火葬されたもので、その点、特殊性がうかがわれるのです。なぜなら、火葬という形は、仏教とともに我が国に渡来したからです。

また、この特殊な横穴群と相まって、中根十五郎穴近辺には虎塚と呼ばれる前方後円墳もあり、さらに、25尺(7m)の高さの巨岩に自然が刻んだ彫刻「獅子(シン)が舞」といわれる奇観もあります。我々祖先の息吹が通っていることを考える時、感激の新たなものであります。」

と結ばれている。

十五郎穴は、昭和30(1955)年3月11日、茨城県告示第154号を以て県史跡となった。調査委員の瑞穂比古が『大日本史』編さんに携わり、優れた民政家であった小宮山風軒の考え方を参考文献に引用したように、十五郎穴は古くから近郷近在に知られていたのである。

また、『市報』42号には[郷土史2]として光圀が造園した三反田の百色山の記事が掲載され、「高場の由来・元禄11年上・下に分村」、「馬渡地方の

歴史ー競馬もあるヤンサマチ」等々の歴史や民俗など、あらゆる分野の記事が連載される。

『市報かつた』第189号(昭和47年1月10日)の新春の希望を語る一面に、市民憲章が呼びかける「スポーツを楽しみ、芸術に親しむ」という内容構成から、平野逸郎(芸術)・岩淵等(スポーツ)・三好明(商業)の新春の言葉が語られたが、その中の半分以上の紙面を費やして、大江志乃夫(勝田市史編さん総括主幹、東京教育大学助教授)の「歴史と市民生活ー人間がつくってきた自然 なぜ市史を作るのか」が掲載される。

「…市民にとって市の歴史をつくるということは、どういう意味があるのだろうか。たとえば、最近非常に大きな問題となっていることに、自然破壊、環境破壊という問題がある。…祖先たちが作りあげてきたバランスは、人間ひとりひとりの性格が違うように、地域によって性格が違う。おなじ隣接の地域でも、城下町を中心として発達した水戸や那珂川川口の港町那珂湊と農村であった勝田市域ではちがうし、おなじ農村でも、近來急速に新興の工業都市として発達しつつある勝田と他の農村ではちがう。古くは那珂川の水運の発達にともなって河岸を持っていた勝田市域という特徴もあり、新しくは沿海都市でありながら工業都市として発達し始めた時にはすでに飛行学校、ひきつづいて射爆場によって海岸からさざぎられ、やむをえず内陸都市として発達しなければならなかった勝田市である。たび重なる那珂川の氾濫の歴史は、沿岸の低地の農民たちに、洪水から身を守るための多くの生活の知恵を生みださせた。住家のつくりから、村や部落の人間関係、交際関係にまで、洪水の歴史が影を落としている。…」

大江の地方史編さんの特色は、市史編さん事業を当初から担当した平野伸生によれば、外部から勝田の歴史・自然を概観し、市民が参加して書き記したことにあるという。最初に刊行した『勝田市史近代・現代編I』の付録のなかで色川大吉は次のように述べた。

「民衆史運動の新しい地平」として『勝田市史』は、個性ある市史としての特色を地域住民の歴史、市民の歴史という点に求め、歴史発展を支えてきた民衆の生活史、住民史という側面に重点をおく。…“市民が市民自身のために、市民自身の市民運動として、盛り上げていくことである”という大江の「基本方針」を評価する。」

また、『市報かつた』第197号には次のような記事がある。

「…出土した土器は、中根の安久三さんのごぼう畑から出土したもので安さんは、ごぼう掘り作業中、偶然発掘したわけですが、早速市の市史編さん室担当に連絡しました。市史編さん担当では、調査の必要上から、安さんに協力依頼したところ、調査が終了するまでの1ヶ月間、その畑の作業を中止し、ごぼうの出荷をも犠牲にして調査に協力してくださいました。…」

この記事の1年後、近接する中根にある虎塚古墳が市史編さん事業の一環として調査され、全長56mの前方後円墳内の横穴式石室から、大勢の市民が見守るなかで装飾壁画が発見されたのである。

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第10回) 鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第28回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第267回) 石川達葵 …3
■考古学者の書棚「国分寺研究総合事典」 藤木 海 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第28回)

山本 暉久

28. 昭和女子大学での考古学 その1

2002(平成14)年4月、昭和女子大学大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授としての勤務が始まった。専任の大学教員として、学部と大学院で考古学を専攻する学生の指導に当たることになったわけである。着任当時は、1989(平成元)年に開設された文学部日本文化史学科という専攻名であったが、翌年、改組され人間文化学部歴史文化学科と名称変更となった。文字とおり、幅広く歴史学を学ぶ学科であり、日本史、西洋史、美術史、人文地理学、民俗学、文化財保存学、エジプト考古学、文化人類学、考古学などの幅広い専攻分野に、それぞれの専任教員が在籍していた。それは今も変わらない。学生達は1年生から2年間は幅広く歴史学にかかわる関連科目や一般教養科目などを履修し、3年生から専門分野のゼミに分かれ、4年次に卒業論文を作成することになるが、1年次からそれぞれの専門分野の科目履修も可能であった。定員は当初は60名程度の小規模な学科であったが、現在は90名定員となっている。

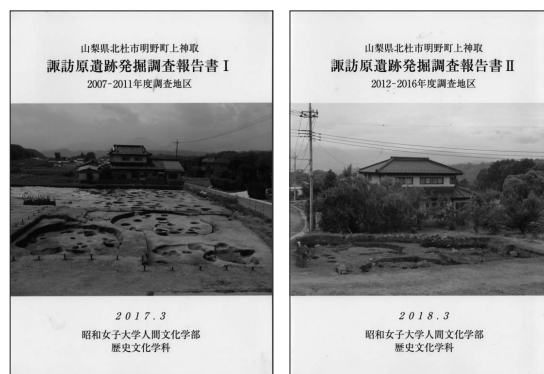
考古学は、私と古墳時代を専門とする小泉玲子先生、東南アジア考古学(とくにヴェトナム考古学)を専門とする菊池誠一先生の3人体制であった。1学年の在籍者数が少ないこともあり、考古学を専攻する学生数は多くても学年別では、あわせて10名前後の少人数であり、学生にとっては恵まれた環境であったように思う。私は、日本考古学の概説や考古学実習、縄文時代の研究にかかわる講義や、3・4年生のゼミ生を指導する演習などが主な科目であった。いうまでもないことだが、考古学を学ぶためには、考古学の方法論、とくに発掘の方法や測量技術の習得が必須であり、そのためには、在学中、実際に遺跡の発掘調査を経験することが不可欠である。幸い、私が赴任する数年前から、小泉先生が中心となって、神奈川県大井町に所在する中屋敷遺跡の調査を実施しており、私もこの調査に参加することとなった。中屋敷遺跡は戦前から知られた弥生時代初頭の遺跡であり、とくに「土偶形容器」(国の重要文化財に指定されている)と呼ばれる特殊な土製品が出土したことで知られており、南関東における弥生文化の成立を知るうえで重要な遺跡であった。調査が進むにつれ、多数の土坑群が検出され、内部から弥生時代初頭の土器破片や、炭化米・アワ・キビなどの雑穀も出土し、ますますその重要性が確認されることとなった。

その調査が一段落した2004(平成16)年、なにか新たな遺跡、それも自分が専門とする縄文時代の遺跡を調査したいと思っていたとき、山梨県明野村(現在の北杜市)に所在する梅之木遺跡が圃場整備事業に伴い調査が行われ、大規模な中期環状集落址が検出された。その保存に向けた確認調査が計画され、私はその調査指導委員会のメンバーとして参加する機会を得ることができた。そのさい、調査を担当していた佐野隆さん(当時明野村[現・北杜市]教育委員会)に、この確認調査に大学として参加することができないかとお願ひしたところ、快諾いただき、2005(平成17)年から2年間夏季休暇を利用して調査に参加することができた。調査にかかる費用は、私立大学に文科省が特別補助する「大学教育高度化推進特別経費(教育・学習方法等改善支援経費)」に大学が申請し採択された額を充てることができた。2週間程度の短い期間の調査ではあったが、参加した学生達にとって貴重な発掘体験となった。宿舎はJR中央本線穴山駅近くの荏崎市穴山町に

ある「穴山温泉能見荘」を紹介してもらい、その後の調査のさいの定宿となった。

梅之木遺跡(2014[平成26]年3月国指定史跡に指定)の調査参加を終えて、さて、これからどうするかと思っていたとき、佐野隆さんから、北杜市明野町上神取に所在する「諏訪原遺跡」を紹介された。茅ヶ岳山麓、塩川の河岸段丘上に立地する縄文時代中期の集落遺跡で、これまで北杜市(旧・明野村)教育委員会により何度か調査が行われてきた結果、大規模な中期集落の存在が明らかにされてきた。まさに本学の発掘調査実習にふさわしい遺跡であった。こうして、2007(平成19)年から、毎年夏季休暇が始まるとすぐに約2週間の発掘調査が始まった。調査費は科学研究費を申請し充当したほか、毎年、学科の実験実習費として大学に申請して安定的な調査費の確保ができた。調査当初は、学生達には、宿泊費は無料としていたが、大学からの指導もあり、宿泊費の実費負担をしてもらうこととなった。毎年夏前に参加者の希望を募ったが、希望者が多く集まり、2週間のうち、参加者を前半と後半に分けることとした。ただ、大学院生や上級生の一部は全期間の参加とすることとした。宿舎は、梅之木遺跡の調査以来、お世話になり安心して宿泊できる「穴山温泉能見荘」を継続して利用することとなった。

諏訪原遺跡の調査は、私が定年退職する年の2016(平成28)年まで10年間という長い期間実施することとなった。2007(平成19)年～2011(平成23)年までの5年間調査した地区は、圃場整備事業に伴い調査できなくなった。その調査した周辺地区は、この圃場整備事業に伴い北杜市教育委員会が記録保存調査を実施し、大きな成果をあげ、報告書も刊行されている。2012(平成24)年からは、道路を挟んで西側の地区の調査を実施した。調査報告書は調査終了後、地区を分けて2分冊で刊行することができた(写真参照)。



▲ 諏訪原遺跡発掘調査報告書 2017・2018

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英一記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 267

丹後府中遺跡群 ～京都府宮津市

石川 達葵

京都府宮津市は京都府北部の日本海に面する地域にあります。その中でも日本三景・天橋立によって宮津湾から隔てられた阿蘇海の北側に面する府中地区には古代～中世の遺跡が集中しています。これらは「丹後府中遺跡群」と総称され、宮津市教育委員会によって継続的な発掘調査が実施されています。

府中地区は古くは「丹後府中」と呼ばれ、古代丹後国府の推定地であるとともに、中世には丹後国の守護所が置かれ、丹後国の政治・経済・文化の中心として栄えた地域です。

府中地区の西端には国指定史跡丹後国分寺跡があり、北側には現在京都府立丹後郷土資料館（愛称：丹後天橋立ミュージアム、2027年秋リニューアルオープン予定）があります。現在、金堂、塔、中門の礎石が残されていますが、これらは建武元年（1334）に丹後国分寺が再興された際の礎石と考えられています。史跡範囲内及び、隣接地（国分遺跡）で実施された発掘調査では確実に古代国分寺に帰属する遺構は見つかっていません。ただし、国分遺跡にて寺域西限を画する施設の可能性のある溝と土塁が検出され、史跡範囲内および国分遺跡から奈良時代末～平安時代初頭の瓦が大量に出土しているため、古代国分寺もこの地に所在した可能性が高いと考えられます。

安国寺遺跡は丹後国分寺跡の東側に位置する遺跡で、現在宮津市教育委員会によって発掘調査がおこなわれています。出土遺物が整理中のため詳細は今後明らかになりますが、「図」と墨書された土器や平城宮式の軒丸・軒平瓦が出土し、国府などの官衙遺跡の存在が想定されています。

中野遺跡は府中地区のほぼ中央に位置する遺跡です。宮津市教育委員会による発掘調査で奈良時代から中世に至る遺構・遺物が確認され、国府・守護所の有力推定地となっています。このうち、古代に関しては石敷き状遺構や土坑が検出されるとともに、大量の須恵器や土師器、緑釉陶器、灰釉陶器や平城宮式軒丸瓦・軒平瓦が出土しました。平安時代後期～室町時代に関しては、掘立柱建物、溝、土坑、井戸、柵列などの遺構が確認されるとともに、大量の国産土器・陶器や貿易陶磁器が出土し、京都の影響を受けて製作された土師器が見つかっています。このように、中野遺跡では各時代の遺構・遺物が確認され、丹後府中の中心的施設の存在が想定できます。さらに丹後地域全体からみても突出した貿易陶磁器の出土量を誇り、京都の影響を受けた土師器が出土することから、他地域との流通・交流も盛んであったことがわかります。

中野遺跡の北東の山腹には今熊野城跡があります。発掘調査で深さ約2mの堀状遺構が検出され、その埋土から16世紀前半の土師器皿が出土しました。

難波野遺跡は丹後国一宮である籠神社の西側に所在する遺跡であり、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されています。このうち、古代以降に関しては特に平安時代後期～鎌倉時代前期にかけて、掘立柱建物や土坑、区画溝、洗い場遺構、石組み遺構が検出され、国産土器・陶器をはじめ貿易陶磁器や漆器や木器など大量の遺物が出土しました。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけては丹後府中において難波野遺跡がもっとも多くの貿易陶磁器が出土する遺跡であり、丹後国府の国府津であった可能性も指摘されています。

府中地区の北に所在する成相山に所在する国指定史跡成相寺旧境内は現在も同地に所在する真言宗寺院である、成相山成相寺の現在の境内地と鎌倉時代以前の旧境内地やその周辺に広がる中世墓群を含む遺跡です。成相寺は西国三十三ヶ所霊場第二十八番札所であり、古代から修験道場として知られた寺院です。発掘調査では現在の境内地から約60m上った地点から土坑、巨石、石列、集石とともに奈良時代後半～鎌倉時代の土器が出土し、この地点が旧境内地と考えられています。発掘調査成果を基に旧境内地には平安時代後期以降石山寺本堂・礼堂（滋賀県大津市）のような懸造の建物があったことが想定されています。また、南北朝時代以降、境内地周辺に中世墓が複数作られ、霊場、聖地化が進んだと評価されています。

このように丹後府中は約4km四方の限られた範囲に古代～中世の遺跡が集中する都市的な地域です。古代は確実な発掘調査成果、文献の記述はありませんが、丹後国府の有力候補地です。中世以降も鎌倉時代には西園寺流洞院家が経営する丹後国衙が置かれ、室町時代には足利氏一門の一色氏の守護所が置かれ、引き続き丹後国の中心として栄えました。特に応仁の乱以降は丹後守護・一色義直が在国し、丹後府中の都市的な整備が進み、「小京都」と呼ばれる文化都市となったと評価されています。その姿は雪舟作「天橋立図」などの絵画作品にも描かれ、広く知られています。

その後、織田信長の配下である細川藤孝・忠興が丹後国に侵攻し一色氏を滅ぼし、宮津市宮津地区に宮津城を築いたため丹後国の中心は同地に移りました。

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは福島大樹さんです。

考古学者の書棚

「国分寺研究総合事典」全3巻

須田 勉 監修／高志書院(2026)

藤木 海

はじめに

国分寺は、奈良時代に聖武天皇が鎮護国家思想に基づいて諸国に建立させた官立の寺院である。今日、全国各地でその遺跡が発掘調査され、詳しい実態が解明されている。本書は、全国の国分寺跡の最新の調査成果を集大成するとともに、国分寺をめぐる諸課題に関する論考を総合的に扱った、研究者のための総合事典である。

本書の内容

本書は、第1巻 遺構編(須田勉・網伸也編)、第2巻 遺物編(須田勉・梶原義実編)、第3巻 文字資料編(須田勉・荒井秀規編)の3巻構成である。遺構を扱う第1巻は、第Ⅰ部を「総論」として、監修者・編者である須田勉氏により、国分寺研究全体を見渡した成果と課題が述べられるとともに(「国分寺研究の成果と課題」)、考古学と建築史学の視角から第一線の研究者が遺構論を総括する(網伸也「古代寺院建築の遺構」、箱崎和久「古代寺院建築の構造」)。第Ⅱ部は「遺構各論」として、塔・金堂などの主要伽藍だけでなく、付属施設や遮蔽・区画施設などの関連遺構も対象に含め、網羅的な集成を行っている。

遺物を扱う第2巻は、第Ⅰ部の総論(梶原義実「国分寺研究の成果と課題」)の後、「畿内七道の国分寺瓦と瓦屋」と題した第Ⅱ部で、瓦と生産窯に関する最新の知見を国毎にコンパクトにまとめ、第Ⅲ部では「宗教具・金属製品・諸物」として仏像・仏具や各種の金属製品とその生産跡、また硯など国分寺を特徴づける遺物を集成する。

文字資料を扱う第3巻は、第Ⅰ部 総論(荒井秀規「国分寺出土文字資料の成果と課題」)の後、文字瓦、木簡、墨書土器といった出土文字資料を集成するとともに、第Ⅲ部 特論では国分寺をめぐる主要な論点を扱った論文10編を収録している。

解 説

角田文衛編による『国分寺の研究』(考古学研究会)の刊行が昭和12年(1937)、同編『新修国分寺の研究』(吉川弘文館)が第7巻 補遺の刊行を以って完結したのが平成9年(1997)で、以来、約30年ぶりの集大成である。江戸時代以来、関心を向けられてきた国分寺跡は、早くからその所在が把握され、史跡指定など保護の措置が講じられてきたことで、高度経済成長等による開発事業の波を受けることは比較的少なく、その分、発掘調査はおもに中心伽藍を対象に限定的に行われる例が多かった。そうしたなか、直近の30年においては、主要堂塔を対象とした範囲・内容確認や史跡整備等の保存目的調査によって解明が飛躍的に進み、周辺地域の開発に伴う調査で運営施設や生産遺跡など実態的な機能を担った施設の事例も増加した。そして、これらの成果を総括した報告書も相次いで刊行されたことにより、この30年で情報量は倍増した。

調査の進展とともに、その研究においても、遺構論・遺物論ともに大きく前進している。2008年には、シンポジウム「国分寺の創建を読む」1・2が開催された。そこでは文献史学や考古学、さらに建築史学などの分野から多角的な論点が提示され、その

成果は2011・13年に刊行された『国分寺の創建』思想・制度編(吉川弘文館)、『同』組織・技術編(ともに須田勉・佐藤信編)に結実した。また、2018年には、東国古代遺跡研究会・窯跡研究会の合同シンポジウムで国分寺瓦窯が取り上げられ、その成果は『古代東国の国分寺瓦窯』(須田勉・河野一也編)と題し、高志書院の「古代東国の考古学」シリーズの一冊として、翌2019年に刊行された。

本書はこれらの蓄積の上に成り立つものであるが、それらが最新の研究を集めた論文集であるに対し、本書の中核をなすのは、前述のように近年において長足の進展をみた国分寺の発掘調査で膨大に蓄積された成果を網羅した資料集成である。とりわけ遺構編において、各種遺構の基本情報や主要な遺構図を、遺構の種別毎に整理・掲出している点は、前述の『国分寺の研究』・『新修国分寺の研究』も含め、前例のない際立った特色となっている。

本書がこうした横断的な構成をとったのは、最新の調査成果を網羅することに加えて、今後、国分寺跡の調査・研究や、史跡としての保存・管理に取り組むうえで、実践的な手引書となることを企図したためである。その背景には、開発行為に伴う発掘調査の増加による資料の蓄積や調査の精緻化、そして問題意識の高まりの一方で、そうした問題が必ずしも各国で一律に認識されているわけではない点をかねてより指摘され、全国的な視野に立って国分寺をめぐる諸課題を論じる必要性を説いた、須田氏の国分寺研究への展望があった。国分寺の伽藍を構成する堂塔は、その規模や造営技術の点で在地寺院のそれを凌駕しており、当時の地方が持ちうる造営力の「上限」を示すという点で、地方寺院全体を比較検討のもとに評価する上での定点を与えるものである。

遺物編に関して付言すれば、長い研究史をもち膨大な蓄積のある国分寺瓦に関する研究の今日における到達点を、本書によって俯瞰できる意義も大きい。国分寺の造営段階や、これに伴う生産体制の実態が、文字瓦を含む瓦の分析から導かれていることは改めて述べるまでもなく、本書により、それらを全国的な視野で、より精緻に比較検討することができよう。加えて、従来、顧みられることの少なかった仏像・仏具をはじめ、金属製品やその生産工房なども種別毎に整理され、瓦とともに国分寺をめぐる生産組織の実態を示す資料として、研究の進展が期待される。

おわりに

国分寺研究の第一人者である須田勉氏が企画し、その理想を具現化した本書は、その網羅性・体系性において、前例のない一書である。本書の刊行は、長い歴史をもつ国分寺研究において大きな画期となるだけでなく、古代寺院研究全体に新たな地平を開き、そこへ向けた指針を与え続けるであろう。国分寺跡の所在自治体をはじめとする公共図書館や、大学研究室(図書館)等に常備され、ひろく活用されることを望みたい。

アルカ通信 No.275

発行日 2026年8月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp